

史的唯物論における生活手段の概念

——生活手段の経済学的規定の意義によせて——

角 田 修 一

はじめに

I 生活過程と生活手段

1 いわゆる生活過程について

2 生活過程と生活手段

——『ドイツ・イデオロギー』を中心に——

II 生活手段・労働者・生産手段のトリアーデ

あとがき

はじめに

資本主義的再生産の考察において、マルクスは、労働者の生活手段を可変資本の素材的存在(要素)と規定した。それは、生活手段の再生産と労働者の再生産との素材的関連を、資本の再生産と労働力商品の再生産との形態的関連のもとに把握することによって得られた経済的形態規定である。同時に、それは生活手段の資本制的所

有と取得の形態（法則）を意味する。だからこそ、マルクスは、所有変革を展望する一節のなかで、生活手段の所有と取得様式の変革を「生産手段の共有を基礎とする個人的所有の再建」として説いたのである。⁽¹⁾

生活手段の特殊歴史的形態としての可変資本の規定は、いわゆる分配論や消費局面の問題ではなく、「資本の生産過程」の部（巻）で、しかも一筋の脈絡をもって論証され、貫ぬかれ、さらに資本蓄積に対応する貧困の分析の軸——「労働者の食いや住宅の状態」、これらは単に賃金の問題ではない——にもなっている。このことは、具体的な現代の生活と労働を統一的に把握するための基礎理論の枠組みが労働過程とその二つの要因（労働者と生産手段）だけに求められてはならないということを示している。さらに、このことは経済学の基礎理論と密接に結びついている史的唯物論（社会と歴史の唯物論的把握）にたいしても、その基本的な諸カテゴリーである生産様式、生産力、生産関係、社会的存在などに生活手段という素材をどのように位置させ、関連させるべきか、またそのためにどのようなカテゴリーが必要か、などを明確にすることをもとめているように思われる。

このことについては、久留間鮫造氏がすでに史的唯物論における重要概念として労働元本（生活手段）のあり方を指摘されておられるのであるが、⁽³⁾現在までのところ、その問題提起はほとんど受けとめられていない。史的唯物論の基礎的カテゴリーの深化、発展、具体化をめぐる議論も、「生活過程」というマルクスのカテゴリーに一定の注目をおいてはいるが、生活手段がそのなかでどのような位置を与えられるのかはなお明確でない。

そこで、本稿は、生活手段の経済学的規定のもつ意義をひろい視野から明らかにする作業の一環として、史的唯物論における生活手段の概念をつぎの順序で明らかにしようとするものである。まず、近年に一部の人が

取りあげているマルクスの「生活過程」なるカテゴリーがそもそも何を言い表わしたものをかを検討し、次に、この「生活過程」とその素材的モメントをなすと考えられる生活手段の基礎的な位置づけについて『ドイツ・イデオロギー』（一八四五―四六年）を中心に検討する。これらの検討からは、これまで史的唯物論の考え方の基本をなすと考えられている労働者と生産手段との結びつき方とは異なったとらえ方が出てくるので、その次にこれらのとらえ方をどのように統一的に把握すればよいのかを、生活手段・労働者・生産手段の三つの条件の相互関連の問題として検討する。ここでは、史的唯物論のより一般的な考え方を明らかにすることが試みられる。

- (1) 拙稿「生活手段の資本主義的形態とその廃棄」『立命館経済学』第二八卷第三・四・五合併号、一九七九年二月。
- (2) そのすぐれた一例として、上田耕一郎「現代の生活における貧困の克服」『岩波講座・現代』第一卷「現代の問題性」、一九六三年、があげられよう。
- (3) 久留間皎造『マルクス経済学レキシコン』5、唯物史観Ⅱ、大月書店、一九七一年、九一―一〇三ページ。同、榮、No.5. 七―一―ページ。

I 生活過程と生活手段

1 いわゆる生活過程について

マルクスは、有名な『経済学批判』「序言」（一八五九年一月）のなかで自らの研究史をふりかえり、ヘーゲルの法哲学の批判的検討を通じて到達した結論として、「法的諸関係ならびに国家諸形態は、……ヘーゲルが……『市民社会』の名のもとにその全体を総括している物質的な生活諸関係に根ざしていること、しかしこの市民社

会の解剖学は経済学のうちに求められるべきこと」をあげた (*Werk*, Bd. 13, S. 8. 邦訳、杉本俊朗訳、国民文庫新訳、一五ページ。傍点——引用者のもの、以下全て同じ)。そして、その後の経済学研究によって明らかに、いったん自分のものになってからは自分の研究の導きの糸として役立つてきた「一般的結論」を、簡潔な文章で定式化したのである。それは、「人間は、彼らの生活の、社会的、生産において」という書きだしではじまっている。また、生産諸力の発展段階に照応する生産諸関係の総体が社会の實在的土台であるという周知の命題のあと、社会的存在と人間の意識との関係規定には含まれた形で、「物質的、生活の、生産様式が、社会的 (social)、政治的、および、精神的、生活過程、一般を制約する」という文章が存在する。

「序言」に何度も登場するこれらの「物質的、生活諸関係」、「生活」、「物質的生活」、「社会的、生活過程」政治的、生活過程」 「精神的、生活過程」などは一体何を言い表わしたもののなか。一見するときわめて日常的な言葉にすぎない。「生活 (Leben, Life)」という語が、なぜこのように多用されているのか。それは単に日常的な意味を表わすにすぎないのだろうか。近年の、史的唯物論の基礎カテゴリーをめぐるいくつかの議論も、このことに注目している。⁽¹⁾たとえば、社会学の田中清助氏は、「序言」における土台—上部構造の関係を実践—理論のカテゴリーに関わるゲゼルシャフトリッヒな部分とし、また「物質的生活……」の一文を土台—上部構造と区別して、広義の・全体としてのゾツィアールな領域、としたうえで、この二つのものが存在—意識という定礎的關係のうゑに相互に交渉する、と把握された。⁽²⁾また、かなり以前からこの「生活過程」なる言葉を積極的に提起してきたことを自負する中野徹三氏は、「序言」の一文や『ドイツ・イデオロギー』の「人間の存在とは彼らの現実的生活過程のことである」という規定に着目し、あらたに「社会的、生活過程」なる概念を史的唯物論の「全体性カテ

ゴリー」として提起される。氏によれば、このカテゴリーは、(1)人間のあらゆる活動の総体を包括する広義の実践概念であり、(2)土台・上部構造をその「実体的契機」としてもち、(3)将来「マルクス主義的社会・人文諸科学の基礎概念」になるものである⁽³⁾。

これにたいし、藤田勇氏は、(1)社会的・政治的・精神的というように重疊的に規定された諸々の生活過程をなせずべて「社会的」と包括されるのか、(2)プロセス(過程)が強調されるのは行為と関係の弁証法の問題につながるが、マルクスのいう社会関係は理論的抽象化の所産であるから、それは認識の諸段階に関わるもので現象の態様に関わるものではない、という疑問を出されている⁽⁴⁾。この疑問はもっともなもので、田中氏や中野氏の議論には、第一に、社会的な生活過程という広義の、しかも包括的なカテゴリーが成立するか否か、成立するとすれば何を意味するのかという問題と、第二に、一般に過程と関係、行為と関係が互いにどのように関わるのかという問題がなお存在する⁽⁵⁾。

そこで、ここでは、第一の点に限定して問題を検討することにした。

『資本論』ではこの「社会的な生活過程」という表現はあまり使われていないが、次のような二つの用例をとりだすことができる。これらはいずれも史的唯物論に関わる重要な叙述のうちに見られることに注目したい。

その一。「古い社会的生産有機体は、労働の生産諸力の低い発展段階によって制約されており、またそれに照応して偏狭な・彼らの物質的な生活創造過程の内部での・したがって彼らどうしのあいだと自然にたいしての・人間たちの諸関係によって制約されている。……およそ、現実的世界の宗教的反射は、実践的な日常生活の諸関係が人間たちにたいし、彼らどうしのあいだと自然にたいして透明で合理的な諸連関をいつでも表わすときのみ、消滅しうる。社会的な生活過程の、すなわち(p) 物質的・生産過程の姿は、それが自由に社会化化する人間たちの産物として彼らの意識的で計画的な制御のもとにある

ときのみ、その神秘的な覆いを脱ぎ捨てる」(*Das Kapital*, Bd. I, S. 93-94. 邦訳、大月版、一〇六ページ)。

見られるように、「社会的生活過程」はここでは物質的生産過程と同じ意味で使われているようである。だが、この箇所はフランス語版になると、「物質的生産とそれに含まれる諸関係」ともよく「社会生活」(*Le Capital*, p. 31. 邦訳、江夏・上杉訳、法政大出版局、上巻、五五ページ)にあらためられており、社会生活が物質的生産よりも広い意味で使われている。こうした変更と前後の叙述から判断して、「社会的生活過程」ないし「社会生活」というカテゴリーは物質的生産を基礎にもつ広義の、しかもその観念的反映と区別された「現実世界」ないし「実践的日常生活」の意味に解してよいであろう。これと同種の用例は次にも見られる。

「これまでの歴史記述は、物質的生産の発展、つまりあらゆる社会生活の基礎、したがってまたすべての現実の歴史の基礎をほとんど知らな……」(*Das Kapital*, Bd. I, S. 195. Note zur 2. Ausg. 邦訳、二二七ページ)

用例その二。「この独自の、歴史的に規定された生産様式に照応する生産諸関係——人間たちが彼らの社会的、生活過程において、彼らの社会的生活の創造において入りこむ諸関係——は、一つの独自の、歴史的で一時的な性格をもっている」(*Das Kapital*, Bd. III, S. 885. 邦訳、一一二二ページ)。

この部分は資本主義的生産様式の科学的分析が証明する事柄の一つとしてあげられたものであるが、一ではさまれた生産諸関係の説明にあてられた部分は、先に掲げた『経済学批判』「序言」の一文と類似している。とくにここでは、「社会的生活過程」とは人間が彼らの社会生活を創造すること(*Erzeugung*)であるという点と、しかもそこでまず彼らの入りこむ関係が生産における諸関係であることが読みとれる。しかし、このことは、人間が入りこむ社会関係が生産関係であることを意味しない。否、むしろ、人間は彼らの生活を創造するにおいて様々な関係に入りこむと見るべきである。マルクスはこれらを「社会的生活諸関係」と表現している。

「技術学は、自然にたいする人間の活動的ふるまい(aktives Verhalten)を、人間の生活の・それとともにまた人間の社会的・生活諸関係やそこから湧き出る精神的諸表象の・直接的生産過程を露わにする。あらゆる宗教史も、この物質的土台を無視するものは——無批判的である。……そのつどの現実的生活諸関係からその天上化された諸形態を展開することが、唯一の唯物論的な、したがって科学的な方法である」(Das Kapital, Bd. I, S. 393. 邦訳、四八七ページ)。

この箇所の「人間生活」以下の文は、フランス語版では「人間の物質的生活の生産過程、したがって社会的関係やそこから生じる知的表象あるいは概念の起源」(Le Capital, p. 162. 邦訳、下巻、三ページ)と書きかえられている。それをあわせて読みとるならば、この一文は、「社会的生活諸関係」の起源は物質的生活にあること、それゆえに「社会的生活諸関係から生じる知的表象あるいは概念の起源」もまた究極において物質的生活にあること、を示していることができる。

これらの例からして、社会的生活過程とは、『経済学批判』「序言」でいうところの「社会的存在」に相当し、生産諸関係の総体である実在的土台よりも広く、精神的生産活動と区別され・精神的諸観念を生みだし・そこに反映される現実的な人間の生活の再生産(生命活動)を意味するものと思われる。社会的生活過程はその内部に人間と自然との関係、および人間相互の関係を含んでおり、これら二重の関係を生産し、再生産する。後者の関係が「人間の生活諸関係、彼らの社会的諸関連、彼らの社会的存在」(『共産党宣言』, Werke, Bd. 4, S. 480. 邦訳、四九三ページ)ともいわれ、ここには、人間の種の再生産における関係と、社会的意識の政治・道徳・法的諸関係への客観化としての「イデオロギー的社会関係」(レーニン『人民の友とはなにか』)とが含まれると解すべきである⁽⁶⁾。以上に見てみたことからわかるように、社会的生活過程は史的唯物論の総体性カテゴリーを意味するもの

とはいえない。これは『ドイツ・イデオロギー』においてもほぼ同様であって、しかもここでは生活過程における生活手段の位置がかなり言及されてもいるので、次にそれをとりあげてみることにする。

- (1) それぞれにその意味するところや位置づけ方は異なるが、中野徹三『マルクス主義の現代的探求』（青木書店、一九七九年。同書は、中野氏がこうした見解を最初に提示された「マルクス主義美学の根本問題」「思想」一九五八年二月、をはじめ近年の論稿を含む）、布施鉄治『行為と社会変革の理論——マルクス主義社会学方法論序説——』（青木書店、一九七二年）、田中清助『社会的意識諸形態』（『現代と思想』第一四号、一九七三年一月所収のシンポジウムでの報告）、田中義久『物質的關係とイデオロギー的關係』（『マルクス主義研究入門』第一卷、哲学、芝田進午編、青木書店、一九七五年）、同『私的所有と社会意識』（『社会学講座』第二卷、社会意識論、見田宗介編、東大出版会、一九七六年）、富沢賢治『生産の総体的把握』（『史的唯物論と現代』第二卷、理論構造と基本概念、服部文男編、青木書店、一九七七年）、黒滝正昭『基本概念の動態的把握』（同上）、などがある。

(2) 田中、前掲誌、七五—八一ページ。

- (3) 中野、前掲書、一四—一六、一三一、一四二—一四九、一七五、一八一—一九四ページ。このような中野氏の見解は、史的唯物論の従来の公式的な見方について、主体としての人間の活動と客体としての世界との実践的相互規定の場を哲学の対象とする「マルクス主義的な主体—客体弁証法」（同書、一三九ページ）の立場から出されているもので、わが国の「実践的唯物論」者や東独におけるH・ザイデル、A・コージングらの新しい試みと共通した点をもっている。ちなみに、H・ザイデルもまた次のようにのべている。「マルクス主義においては、……産業、科学、政治、道徳、芸術を、社会的な生活過程の総体的な諸契機として把握する（ことが肝腎である）」（H. Seidel, Vom praktischen und theoretischen Verhältnis der Menschen zur Wirklichkeit, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie* (DZPh), 1966. 10, S. 1191. 邦訳、芝田進午編訳『現代のマルクス主義哲学論争』青木書店、一九七〇年、一〇八ページ）。A・コージングも物質—意識関係を論じるなかで、意識は「社会的な生活過程を媒介として」物質を反映し、「社会的な生活過程の不可欠の構成要素」として社会システムを調整・制御するとのべつつは（A. Kosing, Die marxistisch-leninistische Weltanschauung und die Grundfrage der Philosophie, *DZPh*, 1969. 8, S. 930-932. 邦訳、

前掲書、二九六―二九九ページ)。

なお、哲学の根本問題と実践概念については、藤坂真『科学論』とコージング・ザイデルの哲学理論』『科学と人間』創刊号、一九七二年四月、向井俊彦『唯物論とヘーゲル研究』文理閣、一九七九年、を参照されたい。

(4) 藤田勇『シンポジウム・史的唯物論の現代的課題』『現代と思想』第一四号、九三―九四ページ。この疑問は直接には田中清助氏の報告にたいしてなされたものであるが、第一の問題点は中野氏の場合にもあてはまると考える。

(5) フランス語版『資本論』は、ドイツ語の「過程」(Prozess)に相当する *process* をあまり使わない。これについては、マルクスの次の言明が参考になる。

「ドイツ語では、『Process』(proceß) という語は経済的な運動という意味で用いられる、……ほかにことばが見つからないなら、これはいくも『mouvement』または類似のことばに訳してもらわなければならない」(一八六九年一月一八日付ボールおよびラウラ・ラファルグあての手紙、『全集』第三二卷、大月書店、五二四―五二五ページ)。

『過程』という語は、現実的諸条件の全体において考察される発展を表現している」(The Capital, p. 77. 邦訳、上巻、一六八ページ)。

(6) 藤田勇『法と経済の一般理論』(日本評論社、一九七四年) 二六―三四ページを参照。なお、藤田氏は社会的存在のなかにイデオロギー的の社会関係を含めておられないようである。

2 生活過程と生活手段

——『ドイツ・イデオロギー』を中心に——

史的唯物論における生活過程概念を強調する人びとによってかならず引きあいに出されるのが、『ドイツ・イデオロギー』(一八四五―一八四六年) 第一卷第一章(篇)である。⁽¹⁾

『ドイツ・イデオロギー』冒頭部分の清書異稿はいう。「われわれが発する諸前提は、……現実的諸前提であ

る。それは現実的諸個人、彼らの行為と物質的生活諸条件……である。それゆえ、これらの前提は純粹に經驗的な方法で確認されう²⁾」(Werke, Bd. 3, S. 20. 花崎訳、二九一三〇ページ。以下、簡単に、S. 20. 二九一三〇ページとだけ記す)。この有名な「出发点」は十分に検討すべき問題を含む。というのは、この現実的諸個人から出発するといふくんだりをあたかも「社会」から出発することと対立的にとらえ、不当にもちあげる見方がありうるからである。社会科学としてあらゆる經驗的事実から出発することは当然の科学的精神であつて、何らかの超越的イデオロギヤや抽象的個人あるいは人間なるものから出発するのではないかぎり、經驗的アプローチで確認できる前提から出発する必要がある。だが、それでは「現実的諸個人と彼らの行為」から出発することが直ちに真に唯物論的な前提になるのかといへば、そうではない。たしかに、アンネンコフあての手紙(一八四六年二月二八日付)でマルクスがいうように「社会とは人間の相互的行為の産物である」(Werke, Bd. 4, S. 548. 邦訳、五六三ページ)。しかし、マルクスも続けていうように、「人間にはあれこれの社会形態を選択する自由はない」。また、個々人の行動や意識のよせあつめが社会であるわけではない。諸個人の行為から出発するだけであれば、近代社会学のT・P・スズンもまた「諸個人の行為からつみあげて社会をそれ自身を体系・構造として把握する」といわれているし、各種の世論調査による各人の意識の集計がかならずしもダイナミックな現実の社会意識をとらえうるものではない³⁾のである。プルードンの社会概念を批判してマルクスが書いたように、「社会は、諸個人からなりたっているのではなく、諸個人が互いに存する諸関連、諸関係の総和を表現しているのである」(Grundrisse, S. 176. 邦訳、大月書店、II、一八六ページ)。

したがって、唯物論的な把握の真の出发点は、単に「現実的諸個人、彼らの行為」なのではなく、まして彼ら

の観念的な諸活動でもなく、社会のなかで生活する諸個人したがって諸個人の社会的に規定された生活でなければならぬ。それゆえに、『ドイツ・イデオロギー』の清書異稿は「現実的諸個人、彼らの行為」のあとに「彼らの物質的生活諸条件——既成のものであれ、彼ら自身の行為によって生みだされたものであれ——」と続けているのである。清書異稿の叙述は、さらにいわばその真の出発点にむかつて論を進めていく。

「ひととは人間を意識、宗教その他好きなものによって動物から区別できる」。経験的方法だけではこうした区別の仕方でもきよう。しかし、「人間自身は、彼らの身体的組織によって制約された処置である彼らの生活手段、生産をはじめるやいなや、動物から自己を区別しはじめ」。あらゆる人間歴史の最初の前提である「生きた人間の諸個人の存在」は、身体組織および自然条件との関係に制約されているが、「人間は彼らの生活手段を生産することによって、間接的に彼らの物質的生活そのものを生産する。」⁴⁾そして、「人間たちが彼らの生活手段を生産する様式」は生活手段の性質に依存しているが、他方、「この様式はむしろすでにこれら諸個人の活動の一定の仕方、彼らの生活をあらわす一定の仕方、彼らの一定の生活様式である。諸個人が彼らの生活をあらわす仕方が、すなわち彼ら自身のある方である。したがって彼らが何であるかは、彼らの生産、すなわち彼らが何を生産し、またいかに生産するかということと一致する」（以上、S. 21. 三〇—三二ページ）。

こうして、唯物論的歴史観の真の出発点は生活手段生産の様式にあること、この生産様式は同時に生活様式でもあること、これらのことが明らかにされる。ここで、最初に出発点とされた「現実的諸個人」なるものが分析された結果、実は「特定の仕方で生産的に活動する特定の諸個人」（S. 22. 三九ページ）であることがはじめて明らかになるのである。最初の出発点の「現実的諸個人」から分析的に進められた叙述によって、社会的に規定さ

れた一定の諸個人という真の出発点が導き出されることに注意しなければならない。

続いて、以上の清書異稿と内容的につながると思われる清書稿の第五ボーゲンに移ると、このような「働き、物質的に生産する諸個人、したがって特定の物質的な、彼らの恣意から独立した諸制限、諸前提、諸条件のもとで活動する諸個人」の生活過程から「社会的編成と国家」が出てくるとされる。さらに、観念・表象・意識を生産し、「政治、法、道徳、宗教、形而上学など言葉にあらわれる精神的生産」（精神的交通）を行なうのもまた、「彼らの生産諸力とそれに照応する交通との特定の発展によって、交通のもっとも拡がった諸形成態にいたるまで制約されている現実的な、働く人間たちである」（S.26、四〇ページ）といわれている。

この次に一つの定義——「意識とは意識された存在（das Bewußte Sein）以外のものではけっしてありえず、そして人間の存在とは彼らの、現実的、生活過程のことである」——が出てくる。中野徹三氏は、この前半部を、「意識とは意識している、存在」と訳すことが、意識を現実的人間の能動的活動としてとらえることだといわれる。⁽⁵⁾ 中野氏には、意識を存在の反映と見ることが意識を縛ってしまうものであるかのように考える傾向があるようだが、この箇所は、訳語上も、またそのすぐ後に出てくる「人間たちの現実的、生活過程から、この生活過程のイデオロギー的な反映と反響をも解明する」（S.26、四二ページ）という叙述からいっても、明らかに意識が存在の反映であることをのべたものである。意識が存在の反映であるということはけっして意識の能動的性質と対立しない。それどころか、とくに科学的認識はきわめて能動的であって、その対象を縦横無尽に分解し、再合成する。⁽⁷⁾ 中野氏はまた「現実的生活過程」のなかに精神的活動を含めておられるが、『ドイツ・イデオロギー』の意味するところは違っている。⁽⁸⁾ 「人間たちの頭脳における幻像も、彼らの物質的な・経験的に確かめうる・そして物質的諸

前提に結びついた・生活過程の必然的な昇華物である。「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定するのである」(S. 26-27, 四二ページ)。まず意識と生活(存在)とを分析し、そのうえで両者の規定関係が明らかにされている。

以上のように、『ドイツ・イデオロギー』における「生活」・「生活過程」・「現実的生活過程」もまた社会的存在の意味をもつ、社会の唯物論的基礎をあらわすカテゴリーであるから、そこに意識を含めたのでは却ってその意味を誤まることになるであろう。ここでもまた、史的唯物論の全体的・包括的カテゴリーを単なる「生活過程」一般に求めることはできないのである。

さて、マルクスやエンゲルスによれば、人間の社会的存在または歴史の唯物論的基礎としての生活の生産には、生活手段の生産と、種の繁殖 \parallel 人間そのものの生産とが含まれる。「家族、私有財産および国家の起源」(一八八四年)におけるエンゲルスの序文はつぎのようになる。

「唯物論的な見解によれば、歴史を究極において規定する要因は、直接的生活(Leben)の生産と再生産とである。しかし、これはそれ自体さらに二種類のものからなっている。一方は生活資料の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方は、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖、である。ある特定の歴史の時代に、ある特定の国の人間がそのもとで生活する社会的諸組織は、二種類の生産によって、すなわち、一方では労働の発展段階、他方では家族の発展段階によって、制約される。労働がなお未発達であればあるほど、……社会制度はますます圧倒的に血縁の紐帯に支配されるものとして現われ」(Werke, Bd. 21, S. 27-28, 邦訳、二十七ページ)。

ここには、生活手段の生産と消費による生活(\parallel 生命)の再生産が社会の究極的要因であるという見解がきわめて明瞭に表明されている。バガトゥーリヤが指摘しているように、この見解は『ドイツ・イデオロギー』の主

原稿にも見られる（但し、そこでの四〜五つの契機の並べ方はなお検討を要すると思うが）。エンゲルスのこの「種の繁殖」についての見解はそれ自体として多くの議論のあるところであるが、⁽¹⁰⁾ここでは次のように理解しておきたい。

人類社会の形成に関するユ・イ・セミョーノフの研究によれば、人類はその形成過程で動物的結合体とそこにおける動物的個体主義にもとづく種の再生産を司る生物的ハレム組織とを克服しつつ、基本的に生産活動にのみ従事する真の社会有機体を形成していった。そして、相互に通婚しあう二つの原始群からなる双方群組織、氏族共同体の出現とともに、「生殖は生産に、生物的性関係は生産関係、社会関係に従属し、動物的本能のうちで最も強力で反社会的なもの——繁殖の本能、性本能——が規制され、集団の恒常的、日常的に監視するところとなった。……〔これによって〕社会的なものと生物的なものととの闘争過程、人類社会の生成過程は終った⁽¹¹⁾」のである。この過程が人類集団の統一の最初の意識形態であるトーテムズムや外婚タブーを生みだしたことを、セミョーノフは詳細に論証している。したがって、人間の社会的存在または生活にはそもそも「人間そのものの生産」すなわち種の繁殖が含まれていると解すべきである。ただしそれは単なる生物的・本能的関係ではなく人間的・社会的関係に転化していること、ならびに物質的生活手段の生産によって基本的に制約されていることに注意する必要がある。エンゲルスが『家族、私有財産および国家の起源』の序文で書いた基本的な主旨もまたそうしたものであったと思われる（当時の研究水準の限界はあるにせよ）。彼は、生活手段の生産と種の再生産の発展段階が生活と社会制度を制約する、つまりこの「二種類の生産」が人間の社会的存在の基本的二要因であり、しかもそのうちの主要なモメントが種の生産から生活手段の生産に移行していくと考えているのである。

このように見てくれば、生活手段こそ人間の社会的存在の素材的に主要なモメントであるということは容易に理解できる事柄である。物質的生産はなによりも生活手段の生産を意味する。そしてこの生活手段が、もう一方の・物質的生産に次いで社会の基礎をなす重要なモメントである・人間それ自体の生産を素材的に支える。この意味で生活手段の生産は「物質的生活そのものを生産する」といわれるのである。生活は人間そのものを生産し、再生産するあらゆる分野の実践である。とすれば、生活手段は当然、単に衣・食・住の手段にとどまらないで、そのうちには衣・食・住の手段のほかに保健・医療、教育、余暇活動、さらに社会の維持・管理などの素材的手段と、これらの生活関連のサービス労働を行なう人びとを再生産する手段とが含まれる。この意味で、直接・間接に生活手段を生産する労働が歴史貫通的な意味での生産的労働であり、これは各々独自の社会的意味と役割を担う生活関連の・いわば生活を生産するサービス労働と明確に区別されなければならない。いわゆる生活様式は、どんな生活手段がどのように生産されるかという生産様式と、生活それ自体を生産するサービス労働の様式とによって規定されるものであり、けっして前者だけで規定されるわけではない。しかし、どんな生活手段がどのように生産されるかということとは人間生活の様式を素材的に支え、これを表現することになるのである。

こうした意味での生活手段の生産様式およびそこに表わされる生活様式（以下簡単に生活手段の生産 \parallel 生活様式と表現する）は、その社会における生産諸力の発展の度合と、直接これに対応する一定の生産諸関係——『ドイツ・イデオロギー』ではとくに分業および生産用具の発達と、交通諸形態および所有諸形態——とにたいして、どのような関連にあるのか。生活手段の生産 \parallel 生活様式はこれらのものと別に存在するのではない。これまで見てきたように、物質的生産がなによりもまず生活手段の生産であるとすれば、どんな種類の生活手段がどれだけ生

産されるかということとは生産諸力の重要な内容を構成するものでなければならぬ。同様に、これらの生活手段を生産し取得する人間相互の社会的関係は生産諸関係の重要な内容をなすものである。生産力と生産関係および生産様式といえは労働者と生産手段の結合の仕方というのが通常の見方であるが、それだけでは一面的であつて生活手段とその生産生活様式をも含めてそれらをとらえるべきである。現代の経済学の重要課題は経済を労働と生活との統一においてとらえることではないかと思われるが、そのためには経済の基礎的場面である生産を、労働と生産手段と生活手段の三つの条件で構成されるものととらえ、これら三条件からなる有機的関連を基礎的に明らかにすることが必要である。⁽¹²⁾ そうでないか、生産様式が生活様式でもあり、そのことが人間の存在様式でもあるという『ドイツ・イデオロギー』の叙述を生かし、現代社会の分析に役立たせることはできない。このことを、次に、あらためて検討することにしよう。

(1) 周知のように、『ドイツ・イデオロギー』のなかでマルクスとエンゲルスがとくにその考えを積極的に展開した第一章(篇というよび方もある)は大小二つの束からなる未完の草稿で、主にエンゲルスの筆蹟で書かれたものにマルクスの加筆・修正・抹消・書込みなどが多数行われたものである。そのため、現在でもその編集の仕方について議論があり、これと関わつてマルクスとエンゲルスの理論的相違といつた問題も一部に論じられている。しかし、これらについて本稿では考察を行なうものではないので、こうした議論も考慮に入れながら、マルクスとエンゲルスの一体性を前提に、当面のテーマに絞つてとりあげることにする。原文については現在の *Werke*, Bd. 3 (一九三二年のアンラッキー編集のものとはほぼ同じ) を用い、訳本はバガトゥーリヤ編『新版ドイツ・イデオロギー』(花崎泉平訳、合同出版、一九六六年)を参照した。草稿の状態やこれまでの各版の相違などについては、合同新書版に翻訳・所収のバガトゥーリヤ論文(Бонпора Фирсофна 1965, 10)・広松渉『マルクス主義の成立過程』(至誠堂新書、一九七四年)、同編『ドイツ・イデオロギー』(河出書房新社、一九七四年)の編者序文・諸言、などを参照した。

- (2) 布施鉄治『行為と社会変革の理論』（青木書店、一九七二年）二四六ページ。
- (3) 佐藤毅編『社会心理学』（有斐閣、一九七一年）四一五ページ。また、佐藤毅氏によると、心理学のなかにも人間の客観的な行為にのみ対象を限定する学派（行動主義心理学）がある。しかしこれは結局のところ機械的決定論による人間と動物の同一視にゆきつくといわれている（同『行動主義心理学』『大月経済学辞典』所収）。
- (4) 梅本克己氏は、『ドイツ・イデオロギー』における「生活手段」という言葉は単に消費手段だけでなく道具など生産手段も含む未分化なもの、と解釈され、その解釈からこの「間接的に彼らの物質的生活そのものを生産する」の「間接的」を道具の生産の意味のようにとらえておられる（同『唯物史観と現代』岩波新書、初版、一九六七年、二〇〇ページ。同『唯物史観と経済学』現代の理論社、一九七六年、二四四―二四六、二七一、二八八―二八九ページ——ここでは一定の訂正の弁がみられるが、岩波新書の第二版でもその趣旨は変わっていないようである）。この解釈は人間労働の固有性を何とか道具の生産に求めるための読みこみであり、『ドイツ・イデオロギー』の「生活手段」に生産手段を含ませるのはそもそも無理であり問題がある。梅本氏は人間と動物との区別は生活手段の「獲得」ではなく道具の生産にあるとされるが、『ドイツ・イデオロギー』はそもそも生活手段の単なる獲得ではなくその「生産」に人間と動物の区別を求めているのである。なお、「間接的……」の理解については本文中で触れる。
- (5) 中野徹三、前掲書、一六七―一六九ページ。
- (6) 藤野渉「史的唯物論の基本的諸概念——中野徹三論文への疑問」『現代と思想』第二二号、一九七五年二月、を参照。
- (7) 見田石介『ヘーゲル大論理学研究』第三卷（大月書店、一九八〇年）一一九ページ。
- (8) 見田石介氏によれば、マルクスが「現実的」という言葉を用いる場合は、観念的過程や理論と区別する意味が多い（前掲書、一一八―一二二ページに具体例をあげた整理が行われているので参照されたい）。
- (9) パガトウーリヤ、前掲論文、合同新書版『ドイツ・イデオロギー』、二〇七ページ。
- (10) エンゲルスの序文は、モルガンが自己流に唯物史観を発見し、主要な点でマルクスと同じ結論に達していた、という評価から書きはじめられている。エンゲルスが序文で唯物史観における生活手段の生産を強調したのは、じつはモルガンが『古代社会』（一八七七年、岩波文庫）の第二第二章で「生活手段の技術」と題して、人類の地上におけ

る制覇の全ての問題を生活手段獲得の技術に求め、人類進歩の主要時期を生活手段生産の拡大に求めていることを念頭においたものである。

この序文が後の史的唯物論の理解に与えた意義と賛否両論を含む議論の状況は一つの検討課題であるが、さしあたり以下の文献が参照されるべきである。プレハーノフ『史的一元論』（一八九五年）、カウツキー『唯物史観』（一九二九年、第一巻第三部第四篇第五章「人間の生産としての生活の生産」——鈴木茂氏の御教示による）、国民文庫版『家族、私有財産および国家の起源』（村井・村田訳、一九五四年）所収の解説、江守五夫「法民族学の基本的課題」『今日の法と法学』（山之内追悼論文集、勁草書房、一九五九年）所収、玉城肇「家族集団と社会発展との関係」『法律時報』第三二巻第一三三号、一九六〇年一月、青山道夫「唯物史観と家族理論」九大『法政研究』第二八巻第一号、一九六一年九月（江守、玉城、青山の三氏の間論争が続けられるが、ここでは文献をこの三つに限っておく）、田中吉六「史的唯物論のエレメントと二種類の生産」『思想』一九六〇年四月号、同「二種類の生産と唯物史観」『思想』一九六九年八月号、福富正美『共同体論争と所有の原理』（未来社、一九七〇年）三五三—三五五ページ、など。

- (11) セミョーノフ『人類社会の形成』下巻（法政大学出版社、一九七一年）三三一ページ。
- (12) 富沢賢治氏は、中野徹三氏の提起を評価しつつ、「生活過程」という概念は「人間のあらゆる行為を含みうる包括的な全体性範疇ではあるが、その内包が規定されないかぎり、まだ漠然とした全体性範疇にとどまらざるをえない」とのべて、生活過程から生産概念を下降法的にとりだそうとされた。ところが、せっかく生活過程の基軸を生活手段の生産に求めながら、生活手段生産を分析するとして、主体的契機（労働）と客観的契機（生産手段）とに分けてしまったために、生活手段と労働との関連をも含むこれら三つの条件の相互関連をとらえられない理論的枠組みにされてしまった。労働と生産手段という従来型の型にそった概念整理には学ぶべきことが多いが、氏の立論では生活手段が二つの生産要素の結果（産物）としての位置しか見いだせない点に疑問をもたざるをえない。また、富沢氏の場合も、現実的生活過程と意識の区別が明確でないこと、『ドイツ・イデオロギー』の主原稿部分に依拠した五つの生産形態の並べ方に検討の余地があるのではないか、などの疑問も残る（同「生産の総体的把握」、前掲書、一二七—一五二ページ参照）。

II 生活手段・労働者・生産手段のトリアーデ

1 これまで行なってきた、まだなお限られた考察からいえば、生活手段は、単に生産の結果（産物）として、生産から区別された分配や消費においてのみ取りあつかわれる素材的条件にすぎないものではなく、はじめから生活手段とならんで生産に不可分に予定された素材的条件として見られるべきであり、むしろ、生産は何よりも生活手段の生産としてとらえられ、人間の現実的生活過程・生活諸関係・生活様式などを制約するものが生活手段の生産様式であることなどが強調されよう。マルクス、エンゲルスによって『ドイツ・イデオロギー』で明らかにされたこうした観点は、その後も彼らによって折にふれ要約的に語られている。

たとえば『哲学の貧困』（一八四七年）は、新たな生産諸力の獲得によって生産様式を変えることは「人間たちの生活資料を獲得する仕方を変えること」であり、それによって「人間たちは彼らのすべての社会的関係を変える」と述べている。マルクスによると、一定の社会的諸関係もまた人間の生産物だというのは、そうした意味においてなのである（*Werke*, Bd. 4, S. 130. 邦訳、一三三—一三四ページ）。また、先に掲げた『経済学批判』「序言」の一節——「彼らの生活の社会的生産」や「物質的生活の生産様式が社会的、政治的および精神的的生活過程一般を制約する」——も『ドイツ・イデオロギー』清書（異）稿の結論を要約したものと見えるであろう。

さらに、エンゲルスは、最晩年のある手紙のなかで次のようにいう。「われわれが社会の歴史を規定する土台とみなしている経済的諸関係とは、一定の社会の人々が彼らの生活資料を生産し、（分業があるかぎり）生産物を相互に交換する、その仕方をいうのです。したがって、生産と運輸との全技術がそのなかに含まれています」

(ボルギウスあての手紙、一八九四年一月二五日。Werke, Bd. 39, S. 205. 邦訳、一八五ページ)。

こうした観点から資本主義的生産Ⅱ生活様式を見れば、次のようになるだろう。機械制大工業のもとであらゆる生活手段は商品として大量かつ多種にわたって生産され、交換されるようになる。しかも生活手段は賃労働者にとっては自己の生産物でありながら他人の所有物(商品)となり、賃労働者は自己の労働力商品と引きかえにでなければそれを入手して労働力商品を再生産できないの⁽¹⁾にたいし、資本はこれによって労働者からたえず剰余労働を取り上げる。これが資本制に固有な、特殊歴史的な形態の生産Ⅱ生活様式である。この内容こそ、『資本論』が社会的再生産の視角のもとで明らかにした生活手段の特殊資本主義的形態としての可変資本の規定にほかならない。つまり、『ドイツ・イデオロギー』以来の見解は、生活手段の(歴史的形態という意味での)あり方によってもまた社会の経済的構造のあり方がきまるということになるのであって、可変資本の規定はその具体化であった。久留間鮫造氏がすでに指摘されているように、まさにこの一点に、史的唯物論における生活手段概念の意義があるといわなければならない。

久留間鮫造氏の紹介にもある通り、マルクスがこの点をはっきり述べているのは、『剰余価値学説史』のうち最も遅く(一八六三年)書かれたリチャード・ジョーンズに関する部分である。マルクスは次のようにいう。

「次のことがジョーンズにおける要点である(労働財源という言葉はたぶんマルサスのものであろう?)。すなわち、社会の経済的構造の全体が、労働の形態に、すなわち労働者が彼の生活手段を・いいかえれば彼の生産物のうち彼がそれによって生活する部分を・取得する形態にかかっている、ということがそれである。この労働財源にはさまざまの形態があり、資本は、労働財源の諸形態の一つ、歴史的には遅く現われた一形態にすぎない」(Werke, Bd. 26-3, S. 405-406. 邦訳、五三六ページ)。

資本が労働財源(この引用でもわかるように、生活手段の特殊な言い方)の特殊歴史的形態の一つだということとは、『資本論』では明確に可変資本に与えられる規定であるが、『剰余価値学説史』にもその点を予想させる箇所がある。すなわち、「資本主義的生産様式とその他の生産様式との」全区別は、労働者によって生産された労働財源が賃金という形態で再び彼の手流入する前に通る形態転化にある」(ebd. S. 417. 邦訳、五五〇ページ)。このように、マルクスは、労働者の生活手段がどのような形態規定のもとで彼らに与えられるかによって社会の経済的構造が決まるというリチャード・ジョーンズの見解を高く評価し、それを可変資本の再生産論的規定に生かし、これによって資本主義とその他の経済構造との対比をより鮮明にした。これらのことが可能であったのは、マルクスの経済学・歴史研究の進展もあるが、何ととってもこの見方がすでに『ドイツ・イデオロギー』段階で獲得されていたことによるものといえることができる。

2 ところで、以上のような見方には当然疑問が生じることが予想される。というのは、こうした見方とは一見して異なったマルクスの叙述が従来広く、もっぱら参照されているからである。たとえば、

「なにがつけられるかではなく、どのようにして、どんな労働手段でつくられるかが、経済的諸時代を区別する。労働手段は、人間の労働力の発達の測定器であるばかりでなく、労働がそのなかで行なわれる社会的諸関係の表示器でもある」(Das Kapital, Bd. I, S. 194-195. 邦訳、二二六ページ)。

「生産の社会的形態がどうであろうと、労働者と生産手段とはいつでも生産の要因である。……この(両方の)結合が実現される特殊な仕方が、社会構造のさまざまな経済的時代を区別する」(ebd., Bd. II, S. 42. 邦訳、四九ページ)。

よく知られたこれらの叙述はいずれも労働過程について——前者はその契機について、後者は生産資本として

のそれについて——書かれた部分に登場するものである。いまこの点はさておくとして、それ自体疑問の余地のないこれらの叙述と、先程までの検討結果とはいったい矛盾するものなのであるか。これまで見てきたところを整理すれば、一般に社会の経済的構造を区別する指標としてマルクスは二通りの言い方をしていることになる。一つは労働者が生活手段を生産し獲得する仕方、もう一つは労働者が生産手段と結合する仕方であり、前者はいわば生産Ⅱ生活様式、後者は生産Ⅱ労働様式といいあらわすことができよう。通常は、この二つの仕方Ⅱ様式のうち後者のみをとるか、そうでなくても後者が前者を一方的に規定すると考え、事実上前者の見方を軽視しているかのどちらかであるように思われる。このことが、生産様式に含まれ、これと対応する生産関係の分析の際に、生産手段の所有形態のみが関心の的になり、生活手段の所有・生産・取得関係が認識のうえで欠落させられてきた大きな要因ではなかったか。少なくとも、前者の『ドイツ・イデオロギー』以来の見方を無視したり、生産様式と切り離された単なる取得様式の問題としてしまうことは正しくないであろう。

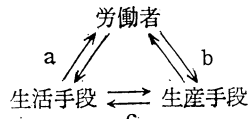
そこで、この二つの見方を詳しく対比してみる必要がある。そうするといずれも共通して労働(者)の特定の形態が一方の契機になっていることがわかる。つまり、前者の生産Ⅱ生活様式では「労働の形態」と生活手段の特殊歴史的形態との結びつきが問題であり、後者の生産Ⅱ労働様式では労働(者)の存在形態と生産手段のあり方との結びつきが問題になっているのである。そして、このどちらも生産力の面と所有関係を軸にする生産関係の面とをもっていることに注意する必要がある。しかも、マルクスはこの二つの見方が矛盾するとは考えず、これら二つの結びつきが現実の特定の生産様式とその把握において対応しあうものと考えている。再びジョーンズに関する叙述のある箇所、マルクスは次のように述べている。

「労働諸条件が労働者に対してとる形態……には、彼の労働の社会的な規定性が対応している。だが、実際には、後者が前者においてただ自分の客観的表現を見いだすだけである。したがってわれわれは、労働財源のさまざまな形態が、労働者が彼自身の生産諸条件に関係するさまざまな様式に対応している、ということを見るであろう。労働者が彼の生産物(またはその一部)を取得する仕方は、彼が彼の生産諸条件に関係する仕方に依存しているのである」(Werke, Bd. 26-3, S. 407. 邦訳、五三七ページ)。

以上のことをまとめてみれば、特殊歴史的な生産様式をとらえるということは、労働と労働者の社会的形態を中間的媒介項とする、生活手段の特殊歴史的形態と生産手段の特殊歴史的形態とのトリアーデ(Trade)形式において、すなわちそれらの有機的関連においてとらえるということにはかならない。これが社会の経済的構造をとらえる理論的枠組みとして、生産様式、生産諸力、生産諸関係などのカテゴリーとそれらの対応関係の考察に生かされる必要があるということである。実際、マルクスは、資本主義的生産様式の分析においてそうしており、たとえば労働財源が労働者にたいして他人の資本として相対するには、生産条件もまた彼らの手からもぎとられて他人の所有物、資本の形をとらなければならぬと述べているし(ebd., S. 413. 邦訳、五四六ページ——誤訳あり)、他の歴史的生産様式についてもこれら三契機の特殊な対応関係をとらえているのである。⁽²⁾

そこで、生活手段—労働者—生産手段の関連についてさらに詳しく考察してみよう。

3 まずはじめに、これら三つの条件の抽象的、一般的な、素材的関連をとりだすことができる。これは、すべての歴史的生産様式の特殊な形態をとりのぞき、それらに共通する歴史貫通的な基礎だけを抽象し、それを分析することによって可能となるもので、第一図のようにいわば三つの条件をおき、各条件の相互関連を一つ一つ分析するという方法である。この考察では、マルクスが行なった「生産の、分配、交換、消費にたいする一般的



第1図

関係」の分析を方法として採用している (vgl. *Grundrisse*, S. 10-21. 邦訳『経済学批判』国民文庫版、二七六—二九二ページ)。

(a) 労働者と生活手段との関連。労働は生きた自然的諸個人⇨労働者の生命活動である。労働は生活手段をつくりだす。労働は何よりも生きた人間諸個人の生命の維持・再生産のために行われるのであるから、労働にとって生活手段の獲得は一つの、しかし最も重要な必然的目的である。マルクスは、「自由の領域は、窮迫と外的合目的性によって規定されて労働すること

とがなくなるところで、はじめて始まる。だからそれは、事柄の本性上、本来の物質的生産の部面のかたにある」(Das Kapital, Bd. III, S. 828. 邦訳『一〇五—一〇六ページ』)とのべているが、これは「必然の領域」が消滅することを意味するものではない。「自己目的として行われる人間の力の発達」⇨「真の自由の領域」は、「個性の十分な発達が必要とする消費範囲」の拡大を基礎としなければならないからである (ebd., S. 833. 邦訳『一一九—一二〇ページ』)。

他方、生活手段は、消耗した労働諸能力を補い、生きた人間諸個人それ自体を生産する個人的消費の手段である。生活手段こそ労働に目的を与え、新たな労働への欲求をつくりだす。生活手段は人間のあらゆる能力を発達させる手段である。生活手段なしに労働は一瞬たりといえども成り立たないという意味で、生活手段は労働を実現するに不可欠な条件である。生活手段に結実してはじめて労働は完成する。こうした意味で、マルクスが「生産と消費」について抽象的に考察した場合のように、労働と生活手段は互いに媒介しあい、互いに相手をつくりだすことによって自分自身を完成させる。これらは生産過程の諸契機、とくにその生活過程の側面をなし相互に作用しあう。そのことを認めたらえて、どちらが「現実の出発点であり、したがってまた優勢な契機である」か

といえ、労働が出発点であり終結点として過程全体の主要な、普遍的モメント⁽³⁾行為であるといわなければならない。

(b) 労働者と生産手段との関連。労働過程の単純な契機は労働、労働対象、労働手段の三つであるが、労働過程をその結果である生産物の立場から見たとき、これらが生産的労働と生産手段として現われる、とマルクスは述べている(*Das Kapital*, Bd. I, S. 193-196. 邦訳、二三五―二三八ページ)。この意味で先に引用したようにこの二つが「生産の要因」といわれるのであって、はじめからこの二つは生産物との関連抜きにありえないカテゴリーである。かつて笹川儀三郎氏は、労働過程の成果である生産物は人間の合目的・目的意識的活動の「実現された目的」であり、生産物の立場から労働過程の三契機を考察することは「生産的消費の立場」である、とされた。そして、生産物の立場からの考察は、労働の合目的・目的意識的活動の立場からする労働手段・労働対象の形態規定を包括する、とされた。⁽⁴⁾この視点から労働と生産手段との関連をみておけば、労働は自己の目的である生産物形成の手段としてすべての対象的労働条件に関連する。生産手段なしに労働の目的達成はありえない。他方、生産手段は単なるもの(実体)ではなく、労働の「実現された目的」に照らして形態規定されて生産手段になる、という関連をもっている。この意味で、生産手段は労働を実現する条件である。労働は生産手段によって制約され、前提されているが、生産手段もまた労働の産物である。したがって、この二つは相互前提、相互媒介の関係にあるが、ここでもやはり労働が主要なモメントである。

ここで、(a)と(b)とをまとめてみると、(a)は実はそこから排除されていた生産手段との対置において、労働とその実現された目的(生活手段)との関連をとりあげたことになるし、(b)も結局生活手段を含む生産物との対置に

において、労働とその目的達成手段（生産手段）との関連をとりあげたことになる。したがって、いずれの二項関連も第三の項と対置されてあるということ、(a)と(b)の見方は互いに排除しあいながら実は関連し補いあうもので、それらはいずれも労働という主要なモメントにおいて統一されている。そこで(c)として、この労働に対置して生活手段と生産手段との関連をとりだすことができる。

(c) 生活手段と生産手段との関連。この両者は各々異なった意味においてはあがあるが、どちらも労働を実現する条件であるという共通性をもっている（この点は後でまた触れる）。また、土地とその付属物は別にして、いずれも労働の産物であるということも共通している。さらに、労働者が労働するためにはまず生きておらねばならず、生きるためには生活手段を絶えず消費しなければならぬから、生活手段もまた生産手段である⁽⁵⁾。また他方、生産手段は自然から生活に必要な対象物を取りだす手段であるから、それ自体生活手段である。しかし、生活手段はそれ自体が目的として人間を生産する（個人的消費手段として個人的消費の場）のにたいし、生産手段はこの目的実現の手段として生産的に消費される、という区別がある。つまり両者は実現された目的と手段という関連をもつ。ところで、ヘーゲルが、『大論理学』の「実現された目的」において、目的より手段の方が尊いとのべていることは有名である。

「そのかぎりて手段は、外的な合目的性の有限な諸目的より高いものである。鋤^{すき}は、それによって作られそしてその目的をなしている直接の消費物より尊いものである。直接の消費物は消え去り忘れられるが、道具は保たれる。人間は、その目的においてはむしろ自然に従属してはいるが、道具においては外的自然の支配力をもっている」(Wissenschaft der Logik, Werke, 6, Suhrkamp, S. 453. 武市訳『大論理学』下巻、岩波書店、二四五ページ)。

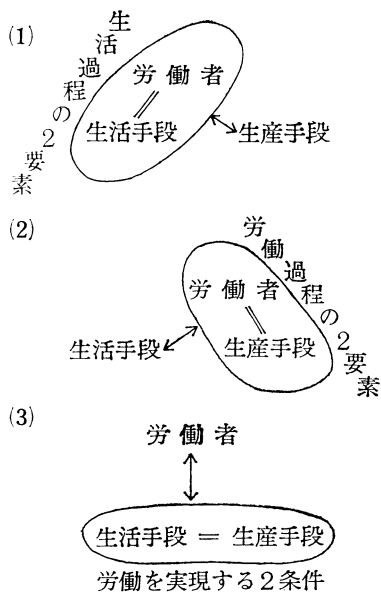
これは、レーニンが『哲学ノート』で「ヘーゲルにおける史的唯物論の萌芽」、「ヘーゲルと史的唯物論」と注

記し、このあとに、「ヘーゲルのうちに萌芽の状態で存在している天才的な諸思想、種子を応用し発展させたものの一つとしての、史的唯物論」と書いたところである(以上、『哲学ノート』松村一人訳、岩波文庫改訂版、上巻、一七〇ページ)。もちろん、ヘーゲルがとりあげた「目的的關係」は、有名な「理性の狡智」の一文にあるように、「目的が直接に或る客観に關係して、これを手段にする……」のであるから、これを労働過程についてのべたものとすれば、この一節もやはり労働という主体的な能動的行動の説明である。だから、この文は生産手段とくに労働手段が主要なモメントだというわけではない。ただヘーゲルが限定された形でのべているこうした一面もあるということは確かであろう。マルクスが労働手段によって経済的時代を区別するといったこともこうした意味である。しかし、それはどんな生活手段がどのような労働の形態でつくれ、労働者がその生活手段をどのように獲得するかということが経済的時代を区別する指標にならないという意味ではない。

以上、きわめて簡単に整理した三つの生産条件の三つの相互關係は、それ自体として社会的形態に関わりのないものであった。しかしこれにとどまらず、生産様式の特歴史的形態の考察においてもマルクスはやはりこの三つのとらえ方を基礎にして一つの有機的全身的な認識を行なったのではないだろうか。そのことを次にあらためて取りあげる。

4 生活手段・労働者・生産手段を生産の三条件とし、各々の特歴史的形態とその關係によって社会の経済的構造をとらえようとすれば、これまで考察した抽象的・一般的關係に対応する三つのとらえ方が成立する(第二回参照)。

第一のとらえ方は、労働の社会的形態(たとえば、個人的労働か集团的労働か、また、自由な独立した労働か他人に従



第2図 生産の3条件の相互関係による生産様式の3つのとらえ方

代の生産と生活の様式が基本的にとらえられる。また、この二つの結びつき方を軸として、それとの関連で生産手段の所有形態やそのあり方がとらえられる。このとらえ方のマルクスやエンゲルスによる表現は、本節1で見たとこである。

第二のとらえ方は、労働者と生産手段の結合様式である。第一のそれと同じ労働と労働者の形態と、生産手段のあり方（土地が中心か生産された生産手段が中心か、小規模なものか大規模なものか、そして、生産手段の所有者がどのような存在形態にあるか、など）との結びつき方によってとらえられる。つまり、歴史的にいかなる形態をとった労働者がどのような生産手段にどのような仕方でも働きかけるか、消耗した生産手段はいかにして補填されるかということである。これによって、各経済的時代の生産と労働の様式の基本がとらえられる。そして、このとらえ

属した労働か、いずれもその中間の色合いはさまざまである）および労働者の存在形態（奴隷・農奴・賃労働者・自営農民・結合労働者など）と、生活手段の特殊歴史的形態（直接に個人的な所有か完全に他人の所有か、など）との結びつき方である。つまり、歴史的にどんな形態の労働者がいかなる生活手段をどのように生産し、かつどのような形態転化を媒介してそれを手に入れるかということである。これによって、各々の経済的時

方からは、生活手段の特殊歴史的形態が一つの結果としてとらえられる。たとえば『ゴータ綱領批判』(一八七五年)の叙述がそれである。

「いつの時代でも、消費諸手段の分配は生産諸条件の分配そのものの結果にすぎないのだが、生産諸条件の分配は生産様式そのもののひとつの特徴である。たとえば資本主義的生産様式の基礎は、物的生産諸条件が資本所有と土地所有という形態で非労働者たちに配分されている一方、大衆は単に人的生産条件すなわち労働力の所有者にすぎない、ということにある。生産の諸要因がこのように配分されているからこそ、消費手段の今日のような分配方式がおのずから生まれる。物的な生産諸条件が労働者たち自身の協同組合的^{ゲゼルシャフト}所有であれば、同様に、今日のそれとはちがった消費手段の分配方式が生まれるであろう」(Werke, Bd. 19, S. 22. 邦訳、二二二ページ)。

このとらえ方のマルクスによる表現は本節2で紹介したが、このほかにもよく参照される次の二節がこの第二のとらえ方に含まれる。

「生産諸条件の所有者の直接生産者にたいする直接的関係こそは——この関係のそのときどきの形態は当然つねに労働の仕方、したがって労働の社会的生産力の、一定の発展段階に対応している——つねに、われわれがそこに全社会的構造の、いたるところのものである」(Das Kapital, Bd. III, S. 799-800. 邦訳、一〇一五ページ)。

第三のとらえ方は、生活手段と生産手段を一括して「労働を実現する客観的諸条件」とよび、これと労働との特殊歴史的な結びつき方を見るものである。たとえば、『資本論』第一部第四章で「二重の意味で自由な労働者」という場合の「第二の本質的条件」を、「労働力のほかに商品として売るものをもっておらず、自分の労働力の実現のために、必要なすべての物から解放放たれており、自由である」という場合である(Das Kapital, Bd. I, S. 183. 邦訳、二二二ページ)。これに対応して、第二第四章でも、「資本関係は、労働者と労働実現諸条件の所有との

分離を前提する」といわれており、労働を実現する諸条件とはいずれも生産手段と生活手段の両方をさしている (ebd., S. 742. 邦訳、九三三—九三四ページ)。労働を現実化する (Verwirklichung) 条件に生産手段が含まれるのは当然として、生活手段がどういう意味で含まれるのかというと、それは「労働者が労働をしているあいだ生きていくための手段」(MEGA, II/Bd.3-1, S. 96. 『マルクス資本論草稿集』④、大月書店、一六九ページ)だからである。生活手段を欠いては労働力を発揮できない。生活手段はもちろん労働過程の直接的契機ではないが、生産過程に不可欠な契機なのである (vgl. ebd., S. 119, 127-128, 140)。生活手段は労働力の生産手段であるともいえる。

また、この第三のとらえ方は、『資本主義的生産に先行する諸形態』(一八五八年)の基本的視点をなしているものである。たとえば、「自由な小土地所有、ならびに東洋的共同体を基礎とする共同的土地所有」のいずれの形態においても、「労働者は自分の所有として彼の労働の客観的条件に関係している。これこそが労働とその物的諸前提との自然的統一である」(Grundrisse, S. 375. 邦訳、『資本主義的生産に先行する諸形態』、手島正毅訳、国民文庫版、七ページ)。この箇所では生活手段が含まれているとは断定できないが、他の箇所でも「労働の客観的諸条件」をあげるときには明らかに生活手段が含まれている (ebd., S. 402, 408. 邦訳、五七、六六ページ)。また何よりも、「労働の資本にたいする、すなわち資本としての客観的な労働の諸条件にたいする関係行為は、労働者が所有者であったり、あるいは所有者が労働したりするさまざまな形態を解体する歴史的過程を前提とする」として、四つの関係の解体をあげるとき、土地、用具の所有とならんで、「労働者が生産者として——したがって彼の生産のあいだ、生産の完了するまえに——生活するのに必要な消費手段を、生産のまえに占有している」ことの解体をあげている (ebd., S. 396-397. 邦訳、四七—四八ページ)。そして、奴隸制と農奴制をとらえる場合でも土地や用具に

対するだけでなく生活手段に対する関係もとりあげているのである（*ibid.*, 399, 401, 邦訳、五二、五五ページ）。

このように、第三のとらえ方は主として資本主義とそれ以前の生産様式とを分ける際に用いられている。その意味で一つの有効な視角ではあるが、具体的に前資本主義的な生産様式を分析するためにはこのとらえ方だけでなく、第一と第二のとらえ方にも依拠しなければならなかった。

以上のことからいえることは、具体的な特殊歴史的生産様式の分析では以上の三つのとらえ方がすべて使われなければならない、どれか一つの視角だけではかならず一面的になるということである。マルクスはこの三つのとらえ方で資本主義的生産様式を縦横に分析した（もちろんこれは抽象的な視角にすぎないから、これにつきるわけではない）。いまこの点を所有変革についていうならば、資本主義的生産様式に対応する資本主義的私有 \parallel 取得様式の否定（いわゆる第二の否定）とは、第三のとらえ方という「労働者と労働実現条件」の分離をなくし、両者の結合を回復することであり、第二のとらえ方では労働実現条件のうちの生産手段にたいして労働者が結合生産者として直接にこれを所有することであり、第一のとらえ方によれば、労働者が生産の前提としても結果としても個人の必要とする生活手段を自由な個人として直接に所有するということである。ところが、資本主義的生産様式以前の所有形態については、マルクスは抽象的次元で、しかも断片的・要約的にのべているところが多い。それらを読みとるとき、以上の三つのとらえ方のどれが基軸になっているのかをよく見定めておかないと、とくにそれを資本主義的形態の否定に應用して語る場合に一体自分がどんな次元で、どんな視角でそれをいうのかがきわめてあいまいになり、結局、一面的なマルクス理解に陥る危険がたえず発生するのである。

最後に、もう一つ、これもよくとりだされるとらえ方——「剰余労働が直接的生産者、労働者から取りあげら

れる形態だけが、もろもろの経済的社會構成体を……區別する」(Das Kapital, Bd. I, S. 231. 邦訳、二八二ページ)——について触れておこう。その社會における一定の生産力が剰余労働の存在を許すか否か、剰余労働が存在する場合にだれがどのようにそれを取返し、使用するかということは、その社會の特殊性をとらえる重要な視角である。では、このとらえ方は先の三つのそれと並ぶものかといえ、そうではない。というのは、この場合、「剰余労働が労働者から取りあげられる形態」を具体的に知ろうとすれば、当然、必要労働(生活手段)がどのような形態のもとに労働者の手に入るかということ、生産手段がどのような関連のもとで労働者になりたいして存在するかということをとらえなければならず、この二つのとらえ方は第三のとらえ方とも関わっているものである。結局、このとらえ方は、前述の三つのとらえ方と並ぶ第四のとらえ方ではなく、これらと矛盾するとらえ方でもなく、むしろ以上の三つのとらえ方によってその内容を与えられるべき特殊具体的なものといふことができる。以上三つの基本的視角とそれらの総合による生産様式の分析は、生産力や生産関係といったカテゴリーにもとづく分析の具体的で豊かな内容をなすものであり、けっしてこれらと相対立するものではない。ただ、マルクス、エンゲルスがそのつどのべているさまざまなとらえ方を整理し、それらを統一的に把握しようとするれば、結局この三つのものに帰着するし、従来の理論的枠組みからいえば生活手段という素材的モメントを一点、史的唯物論の重要なカテゴリーとして位置づけることによって、マルクス、エンゲルスがもっていたより一般的な理論的枠組みを明らかにできるのではないかと思われるのである。

(一) 久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコン』5、唯物史観Ⅱ、大月書店、一九七一年、九一—一〇三ページ、葉No.5の七一—一ページ参照。史的唯物論の重要概念としていわゆる労働元本を提起されたのは久留間氏が唯一では

史的唯物論における生活手段の概念(角田)

五九(三四五)

なからうか。

(2) 拙稿、前掲、一八三—一九一ページ参照。

(3) この点、見田石介『資本論の方法』(弘文堂、一九六三年)一九四—一九五ページ、『著作集』第四卷、一九六一—九七ページ、および、拙稿「書評『見田石介著作集 第一卷』ヘーゲル論理学と社会科学」、『立命館経済学』第二六卷第二号、一九七七年六月、を参照されたい。

(4) 笹川儀三郎「生産力の構成要素について——主として労働過程の諸契機との関連において——」、『経営研究』第一九号、一九五五年九月、の前半部分。なお、これにたいする笹川氏自身の現時点での評価や近年の技術論論争について書かれた『技術の概念』について二、三——嶋啓著『技術論論争』を読んで——『経済』一九七九年九月号、をも参照。

(5) 「労働力が生産手段(労働力そのものの生産手段としての生活手段をも含めて)から分離された状態にある…」(『Das Kapital, Bd. II, S. 37. 邦訳、四三三ページ』)。

(6) 『見田石介著作集』第一卷、大月書店、一一九—一二〇ページ。

あとがき

本稿の立論は、生産手段にかえて生活手段をより重要な位置におこうというものではないし、生産手段の重要性を否定するものでもない。ただ、これまでわが国の史的唯物論や経済学ではなぜかほとんど欠落し、低い位置しか与えられてこなかった生活手段という素材を、少なくとも生産手段と同じ位置に「昇格」させようと試みるものにすぎない。しかし、そのことによって、マルクスやエンゲルスがさまざまな機会にのべている諸命題を生産の三つの条件を各々の仕方できみあわせた見方とみることができ、各命題を互いに矛盾なく理解できると思われるのである。本稿では、とくに議論の多い史的唯物論の基礎的な諸カテゴリーについてほとんど考察を行

なっていない。そのために、生活手段の位置づけも明確さを欠くことになったかもしれないが、これは今後の課題としたい。また、「生活過程」という、とくに初期のマルクスやエンゲルスが多く用いたカテゴリーについても、たとえばこれはヘーゲルがその『論理学』において「生命」を扱ったなかでのべている「生命過程 (Lebensprozess)」と直接には同じであるが、これを彼らがどのようにその下敷きにし、またのりこえたのか、といった問題や、『経済学・哲学手稿』(一八四四年)の「類的生活」や「生活活動」との比較、「疎外された労働」との関係りなどの問題がなお残されている。経済学でも、史的唯物論における生活手段の位置づけの弱点と対応して、なおいくつかの問題がある。生活手段の経済学的規定をめぐるマルクスの学史的位置や、空想的社会主義者たちとの関係、さらに生活手段の経済学的規定を所有論からどのようにみるか、生活手段の個人的所有再建の意義などがそれである。あわせてこれからの課題としたい。